

文学としての出家遁世談

Shukke-tonsei stories as Literature

Margaret H. Childs*

Now that so much time has been spent on literary historical questions surrounding medieval *shukke-tonsei* stories, it is time to take a new look at their literary value. Since they are granted status in the literary corpus, we can assume they have some literary value. However, when we use them only to study historical issues, we are treating them as artifacts, not as literature. This view is based upon work by Barbara Herrnstein Smith (*On the Margins of Discourse*, University of Chicago Press, 1978), who divides all verbal discourse into either natural discourse, what we understand and interpret in a specific historical context, and fictive discourse, which we understand and interpret creatively. Fictive discourse refers to “verbal structures that have been designed or discovered to...invite and reward...cognitive play” (p. 121). Cognitive play includes “the exploration of the formal and symbolic properties of language” (p. 121) and “contextually unrestricted interpretation,” i.e., identifying and making explicit

* MARGARET H. CHILDS 〔現職〕 ペンシルバニア大学大学院生

the propositions (the work) exemplifies” (p. 142).

My question is, how rewarding are *Aki no yo no nagamonogatari* and *Sannin hoshi*, two stories that have traditionally been highly regarded, when we read them as fictive discourse?

Looking for “formal and symbolic properties,” we find that the sermon with which *Aki no yo no nagamonogatari* begins, introduces metaphors basic to the story’s meaning: “the blossoming of trees in spring increases the tendency to aspire to supreme enlightenment, and as the autumn moon sinks to the bottom of the water it symbolizes the salvation of all beings (‘Chigo monogatari: Love Stories or Buddhist Sermons?’ *Monumenta Nipponica* 35. 2, p. 132). Consistently identifying Umewaka, Keikai’s beloved, with spring blossoms and the autumn moon, the text hints that Umewaka is not an obstacle to Keikai’s longed for religious awakening, but the agent of its attainment. Considering the process by which Keikai comes to a religious awakening, we can identify the proposition that romantic love and faith are fired by the same energy: Keikai falls in love with Umewaka after he has begun an earnest search for religious inspiration, and he achieves a religious awakening only when the object of his passion is lost to him.

The first two tales that comprise *Sannin hoshi* present characters whose religious awakenings can be interpreted in a variety of ways. The third tale, on the other hand, is the static and repetitive presentation of a man’s heart-rending reunion with his children six years after having abandoned them to become a priest. The reader feels as though he has only one piece of a

puzzle to consider. This part of *Sannin hoshi*, at least, is *not* rewarding as an object of cognitive play.

今日は、これから文学としての出家遁世談という題で発表させていただきます。

つい最近まで、日本の中世物語文学の研究では、歴史的な研究が、圧倒的に多くて、物語の文学性、物語そのものについての研究が、あまり行われていなかったように思われます。書物がいつだれによって、又、何のために書かれたか、先行文学、伝本の整理、その社会的背景などの基礎的研究がかなり進んで来た現在、ようやく物語そのものを見る余裕ができたと言えるでしょう。そこで今度は物語そのものの解釈が必要になって来ます。なぜなら、何百年たってからでも物語が読まれているからこそ、文学と言われていると思うからです。歴史を知るために読むのは資料としてであって、文学としてはありません。書物を読んで、どういうふうに理解と鑑賞ができるかを考えて、はじめて文学として取り扱うことになるというのが、私の文学観です。

この文学観はアメリカのペンシルバニア大学のバーバラ・ハンスティン・スミス教授の文学論によるものです。簡単にご紹介したいと思います。スミス氏の文学論では、どうして又は、どういうふうに書物を読むかによって、文学を定義します。書物の客観的、形式的な性質ではなくて、その書物に読者が持たせる機能によって、その書物が文学の範囲に入るかどうかを決めます。このために言葉の機能を考えて二種類に分けることにしました。一つは NATURAL DISCOURSE・自然の言葉です。もう一つは FICTIVE DISCOURSE・作りごとです。NATURAL DISCOURSE と言うのは、ある人が、ある時に、ある所で、ある事情で、何かのために話した、あるいは、書いた言葉です。その言葉の意味を理解するために、その文脈を考えます。例えば、もし私がまず「1時半です」と言ったとしたら、その意味は「ただ

1時半です」と言うことではなくて、「この集會がはじまりますね」とか、「ああ、もうじき私の番です。がんばらなくちゃ」という意味だったでしょう。私の意味を理解するためには、皆さまが、解釈しなければなりません。まわりを見て、私の顔を見て解釈するわけです。

それから NATURAL DISCOURSE の場合、実利的な所までの解釈しかしません。例えば、「1時半です」と言う言葉に対しては、「時間が早く立ちます、悲しいですね」という意味までは解釈しません。そういう解釈は NATURAL DISCOURSE の場合、実利的なものではなくて、余分なのです。

しかし FICTIVE DISCOURSE・作りごと・の場合、言葉に特定な文脈がありません。あるいは、もっと正確に言えば、その意味が、その歴史的な、事実に基づいた文脈には、よらないと言うことです。例えば SHAKESPEARE のソネットを読む時、「SHAKESPEARE の恋人はだれだったか」とか「どういう関係だったか」とは聞きません。実際の歴史的な事情とは関係なく、そのソネットの意味にふさわしい、もつともらしい文脈を想像します。「どういう人がどういう事情でそのソネットの言葉をいうだろうか」と考えます。これが FICTIVE DISCOURSE の場合の解釈です。読者がそういうふう解釈して、はじめて、そのソネットの文学としての意味が出来ます。SHAKESPEARE もこのためにそれを書いたのです。

要するに SHAKESPEARE のソネットの言葉を SHAKESPEARE 自身が発言した言葉として読まないで、SHAKESPEARE が考え出した、架空の人物の言葉として読みます。ソネットの意味を理解するのに、まわりを見ても役に立ちません。自分で想像して解釈します。このことはスミス氏の文学論では認知的遊び (COGNITIVE PLAY) と呼ばれています。「どうして遊びと言うか」を説明しますと、NATURAL DISCOURSE の場合には実利的なことまでの解釈しかしませんが、FICTIVE DISCOURSE の場合には限定がなくなります。ですから、読者は想像力を働かせることができるのです。

解釈にはもう一つのレベルがあります。書物の言葉の文脈を一つ一つ想像してから、全体的にその登場人物の生活の状態を考えて意義を見付けるというものです。例えば『ROMEO AND JULIET』を読んでその二人の性格を解釈してから、その二人の人生を考えて、愛情は悲嘆の元であるとか、愛は常識を毀すものであるとか、若者の熱情は恐しいとか、愛のために人はバカになるとか、読者によっていろんな意義を同時に見付けることが出来ます。この FICTIVE DISCOURSE の意義の無限性のために、FICTIVE DISCOURSE として書物を読んで解釈することが楽しみになります。したがって認識的遊びと言います。

それから認識的遊びには、もう一つの部分があります。言葉の形式的な、象徴的な性質、例えば、リズムとか、隠喩とか、文体などです。NATURAL DISCOURSE の場合でも言葉にこういう性質がいくらかありますが、注意しただけで、FICTIVE DISCOURSE の場合にはそれを探索するのです。

前置きが長くなりましたが、私の立場を、今から発表することを理解してもらうのに、はっきりさせておいた方がいいと思いました。

これから文学としての二つの出家遁世談を解釈して見たいと思います。まず『秋の夜の長物語』の概略からはじめましょう。

叡山東塔の桂海律師は、落花を見て己が朝暮ただ名聞利欲に耽り、出離生死の務めを怠っていたことを翻然として顧み、これまでの叡山の生活に慚らず、真の修行を求めて離山を決心する。しかし容易に実行にうつすことができず苦しむ中に、石山観音に通夜して美しい児を夢みて、却って煩惱にとりつかれる。その中に、はからずも園城寺で夢中の児をかいま見、それが花園左大臣の息梅若公である事を知り、伝手を得て遂に一夜の契りを交した。ある日梅若は桂海を慕って山に赴く途中、天狗に誘拐され吉野大峯の石牢に閉じ籠められてしまう。

児の失踪に寺門の騒動は一通りでない。これこそ山門の桂海のしわざで、父左大臣も承知の上の事と思い、まず花園邸を焼き払い、戒壇に事寄せて山

の僧徒をおびき寄せ、一泡ふかそうと計った。かくて延暦、園城の両巨刹の大衆の衝突となり、争因が我が身から起った桂海は、死を覚悟して奮戦し、結局寺は全焼する。

梅若幽閉の牢に新たに一人の老翁が入れられたがこれは淡路の竜で、梅若の涙（水）を得て再び竜に現じ牢を破って、梅若を救い出した。梅若は父の邸も我が院も灰燼に帰したのを見て、悲しみのあまり瀬田から入水する。桂海も悲歎にくれ自害しようとするが、思いかえして、これを機縁に年来素志の離山を遂げ、西山岩倉において行いすまし、瞻西上人と仰がれたという。

この物語は昔から高く評価されているためになりによく研究されて来た物語です。その文学性について論じた論文もあります。西沢正二氏は、『秋の夜の長物語』の構造」という論文にその特質を検討して「生き生きとした感動を伝えている」同性愛物語と、「新鮮さに乏しい」説話的な部分と、「常套的、一般的な」高僧発心談の部分から成り立っている物語と考えられました。それから「高僧発心談の部分は…同性愛物語と説話的事件という二つの世界を包み込み、その中心的な物語に文学性をもたらしている」と判断されました。

この結論は正しいと思いますし、このように構造を考えることは認識的遊びになります。ただし、物語を絵とか建築のように取り扱っているという感じが少しします。例えば、木とレンガで出来た家で周りが石の塀で囲まれているという一軒の家を見ているように物語全体を一目で見えるように単純に分析しているのだと思います。もちろん読んでからはそう見えて来ますが、私は物語を先ず、読んで行き、物語の進行に沿いながら、いわばその流れに乗って行くものとして読んで行きたいと思います。

『秋の夜の長物語』を読みはじめると、お説教があります。多くの解説はこれをほとんど無視していますが、大変重要な部分です。「夫春の花の樹頭にのぼるは、上求菩提をすすめ」と書いてあります。物語では梅若がよく春の花にたとえられたり連想させられたりしていて、桂海を発心に導く役割を梅

若は持っているということを意味すると思います。このようにお説教には物語の内容を比喩的に表現したところが見付けられるからです。

梅若が花にたとえられているのはプリントに書いてある桂海の歌（知らせばやほの見し花の面影に立ちそう雲の迷う心を）など、全部で7ヶ所ほどあります。

又お説教が「秋の月の水底にくだるのは下化の衆生の相をあらわす」と続けています。これは秋の月の光が水面だけではなく水底までも照らす、つまり、仏の慈悲はどんな生き物にもほどこされることを言っています。仏の慈悲が秋の月にたとえられています。秋の月と梅若が関連していることも6回出て来ます。例を上げますと梅若が三井寺でどれだけ人気者であるかを伝えるのに「中秋の月のくまなきに皆我家の光を争うなる風情にてそろろうを」と言って梅若を秋の月にたとえています。

説話的事件の部分ではこういう比喩的な言葉の遊びはありませんが、筋が悪くないと思います。梅若が天狗にさらわれた話はびっくりさせるもので調子の変化があり読者をよろこばせます。この説話的事件の部分は梅若がすぐわれるか、戦いの結果は、はたしてどうなるかというサスペンスに富んだ部分として純粋に楽しめる部分ですし、全体的にも話の重要な問題の解決を伸す働きがあります。と同時に筋を梅若の死に直接に結びつけてゆきます。最後に30人の三井寺のお坊さんが新羅大明神の前に通夜して、夢の中で大明神のお説教があり、石山観音が桂海の発心のため児に変じて現れたということを知られます。うまく結びついていると思われまして、この物語の教訓的なメッセージ、つまり方便によってすくいもたらされるということが、語り手ではなくて違う登場人物によって語られるためにかえって強められています。

これは一見できる話の構造というよりも、読んで行く時の話の流れだと思います。このように読んでみると、この物語は木とレンガと石の塀、というように、全然別々の材料によって作られた物語というよりも、統合性のある、

一貫した物語として理解できると思います。

さて登場人物の解釈の場合、何より面白いのは桂海の精神的状態を解釈しようとする事です。観音の奇跡のために桂海が発心できたという中世信仰によらない、むしろ認知的遊びとしての解釈をここでして見たいと思います。ただ単に桂海が発心するのに苦しまなければならなかったとも言えますがもう少し詳しく考えた方が面白いと思います。桂海は発心したい気持ちも強かったのですが、俗世にも又強く執着していました。発心したい気持ちが強くなって来ると同時に俗世に対する執着も強くなります。それで桂海は執着を梅若に集中しますが、その対象が存在しなくなった時、執着は完全に消えてしまいます。そのために梅若を愛した情熱で悟りを求めることができたのです。

こういうふうを考えて、私は『秋の夜の長物語』の中に恋愛は信仰のうらがえしだという意義を見出します。キリスト教にもこれが見えます。カトリック宗の神父さんには教会と「結婚」する、尼さんはキリスト様と「結婚」するという言い方があります。仏教でもお坊さんや尼さんに対して性的関係は禁止されていますが、恋愛のエネルギーを信仰ひとすじに向けるべきだという意味なのではないでしょうか。『秋の夜の長物語』は人間の破壊的な恐ろしい心を仏教の慈悲に転化して建設的なものに向わせた物語ではないでしょうか。これが『秋の夜の長物語』を面白い作品として読むことのできた私の解釈です。

『三人法師』も「中世小説にあつて屈指の作である」と市古貞次先生が書いたように高く評価されています。しかし私には認知的遊びの対象としてそんなに鑑賞できる話とは思えません。『三人法師』の概略を見ておきましょう。

高野山に修行する3人の出家が、ある時集まって、それぞれ懺悔談をすることになった。第1の出家は將軍足利尊氏に仕えた糟谷四郎左衛門という武士であった。彼は二條殿の女房を一目見て恋の病となり、將軍の計らいで首

尾よく契りを結んだが、12月24日年来信仰する北野天神に参籠している間に、恋女房が往来で殺されてしまった。仇を討とうにも相手が分らず、これを機縁に出家する。第2の僧は、その加害者は自分だと白状して語り出す。彼は三條荒五郎と言い京に聞えた怪盗であるが、その年の暮はよい収穫もなく女房にせめられて辻斬に出て、美しい女房をさし殺し、衣類を奪った。それを家に持ち帰ると、妻は被害者が美女であると聞き、自ら外に出てその女の髪を切り取って持ち帰り、大いに喜んでいる。荒五郎は女の浅ましさにいや気がさし、美女を殺した事が後悔されて出家した。第3の僧は楠木の一族、篠崎六郎左衛門である。彼が切に諫めたにもかかわらず、楠木正儀は北朝に降参したので、これを機縁に出家した。

以上が上巻で、下巻は篠崎の後日談である。出家した篠崎は、諸国修行に年を経て久しぶりで故郷を尋ねるとすっかり荒廃している。ちょうど妻が死んで3日目で、九つと六つの遺児が実の父とは知らず、彼に亡母の供養をたのむ…という哀話がそこに展開されています。

『三人法師』についての論文は少くありません。関根賢司氏は今月の『国文学 解釈と鑑賞』で冬から春へという時間的構造および悪から善へ、殺人から発心遁世へ、などの流れの中で「あながち悪をきらうべからず、善のうらなり」という世俗の価値観の顛倒という意義を指摘しています。西沢正二氏も『三人法師』を取り上げて、三つの話の「密接な関連性」を細かく説明しましたし、構想を考えた結果、「第1、2話においてある人間が…家族関係によって発心をし、第3話において…発心したものが…家族関係をもう一度、乗り越えることによって、真の高次の発心遁世を…遂げるという構造」だと結論しました。

これらも『三人法師』の意味をより豊かなものにする論文だと思います。しかし私が『三人法師』を読んで見ると面白い面も面白くない面もあります。結論からいうと、第1話、第2話は面白いですが、第3話には想像力を働かせる余地が少ないので面白くありません。

第1話で糟谷と彼の恋女房、尾上殿との恋愛話は割合順調に進んで、しあわせになるという特徴のない話ですが、尾上殿が殺されたと知った糟谷の反応はかなり細かく描いてありますので糟谷の心がよく分かる気がします。まず殺された尾上殿に対して糟谷は怒りの気持を持ちます。「逢うをうれしと思ひしも、今はかへりてうらみなり。」それから自分のせいになります。「我故に君もいまだ二十に足らずして、女房の身として邪見の剣の先にかかり給ふ事よ。」それからようやく、彼女を殺した相手に対して怒りに燃えて「いかなる鬼神」でも命を捨ててもいいと思うほどです。しかしその悪人を知らないために何もできません。こうして出家することを決心するのですが、これは一体どうしてでしょうか、無常を感じたか、悲しくてたまらなかったか、怒りをぶちまけることが出来なくてくやしかったか、いろんな気持ちが混乱してそれに耐えられなかったのか、はっきり解釈出来ない点に不満を感じるかも知れませんがとにかく認識的遊びとして想像力をよくかきたたせる場面だとは言えるでしょう。

第2話になりますと、荒五郎にとっては夜討と強盗が、ただ仕事だという態度とか尾上殿の死ぎわの落ち着いた、勇氣ある姿が面白いです。中でも私にとって一番興味深いことは荒五郎の発心のきっかけです。荒五郎が尾上殿を何げなく殺してから、奥さんの喜びを予想して帰ります。そして奥さんが尾上殿の髪を切って来て「さても女の宝もうけたり、あらうれしや」と言います。荒五郎はこれを予想以上の喜びと思い、女の情ない、あさましい心を知り「かかる女に枕を並べ契を結びし事こそ返す返へすもくやしけれ。」と思って出家しました。さてこのような荒五郎と彼の奥さんとは一体どういう人間でしょうか。どちらが悪いのでしょうか。私が注目したいことは、奥さんの情なさを見て自分の邪悪さを知った荒五郎が、それがあまりにひどいために、それをかえって意識できなくて、その自己嫌悪に代って奥さんを憎んで、はじめて後悔して出家できたことです。

ところが第3話は前半になっている2話とほぼ同じ長さですが筋にしても

篠崎の心の描写にしても、何の変化もない話です。篠崎の捨てた家族のために彼が辛い目に合うという話がくりかえし、くりかえし出て来ます。

篠崎が出家したことを5回ほど語ってあります。篠崎が自分自身で語ったあと、彼が捨てた家族の面倒を見たおじいさんが又その話をし、さらに娘が3回も語ります。それから「自分がその篠崎だ!」「自分がお父さんだ!」と言いたくてしようがないということを4回も書いてあります。耳で享受したら、このくどい話を楽しむことができるかも知れませんが目で読むと疲れるだけです。解釈を楽しむ余裕がないからです。このために私にとっては文学として高く評価することがむづかしいのです。ドナルド・キーン先生も私と同じ意見なのでしょう。キーン先生の『三人法師』の英訳は第1話第2話だけで、第3話がけずられています。

以上のような解釈が私の言った FICTIVE DISCOURSE の認識的遊びとしての解釈になります。

当然、別の解釈もありうると思いますので、みなさまのご意見やご批判を聞かせていただければさいわい입니다。以上で私の発表をおわらせていただきます。

討議要旨

位藤邦生氏から、発表された論理で詩と小説の解釈をも同じレベルでやっていいものか、また、認識遊びという言葉であらわされている実体は作品のテーマをさぐるということと同じようなものであるかどうか、との質問があった。発表者から、詩、小説や演劇などジャンルの違うものでも Fictive discourse で解釈できる。しかし、それぞれのジャンルによって認識遊びのレベルは若干違いただろう。また、後者の質問については、ほぼ同じようなものだと思うとの返答があった。この返答をうけて、再び位藤氏から、「恋愛は信仰の裏がえし」という一つの〈認識〉を『秋の夜の長物語』から抽出され

たが、認識遊びがテーマをさぐるということと同様のことであったとしても、かかわらず今の〈認識〉の抽出の手続きはテーマをさぐるということとは必ずしも一致していないのではないかと思われたとのコメントがあった。

ドナルド・キーン氏から、発表の中で出てきた『三人法師』のことにつき、それを翻訳したのは25・6年前のことであるが、当時は自分も三人目の法師の話は、つまらないと感じた。それで、三人目の話は訳さなかったのだが、発表者も当時の私と同様の意見であるようなので、興味深かった。ともあれ発表者が、中世のものがたりを文学として分析、研究していこうとしている姿勢はいいことで評価できるとのコメントがあった。